

VI 技術資料

1 長期中干し

- 10aあたり1本以上の溝切りを原則実施する
- 中干しの期間は、通常より長く14日間以上行う

(1) 環境保全効果（地球温暖化防止効果）

- 水田は、温室効果ガスの主要な発生源です。
- 湛水状態の土壌では大量のメタンが発生し、そのほとんどが大気中に放出されます。
- メタンを発生させる菌は酸素を嫌います。長期中干しを行うことで、水田の土壌が乾燥し、土の中に酸素が行きわたることによって、メタンを発生させる菌の活動を抑えることができます。
- 交付金の取組では、通常よりも一週間程度延長し、14日間以上行うことを要件としています。14日間以上の中干しによって、コメの収量への影響を抑えつつ水田からのメタン発生量を削減できます。

温室効果ガスは、大気中の熱（赤外線）を吸収する性質を持つガスです。二酸化炭素やメタン、フロンガスなどがあります。大気中の温室効果ガスが増えると、温室効果が強くなり、より地表付近の気温が上がり、地球温暖化につながります。温室効果の大きさはガスによって異なり、例えばメタンは二酸化炭素の25倍の温室効果があります。

(2) 技術内容

① 開始適期

目標とする穂数の8割の茎数が確保できれば、遅れずに溝切り、中干しを行う。

移植時期による開始の目安

移植時期	中干し開始の目安時期
5月上旬	6月 5日頃
5月中旬	6月10日頃
5月下旬	6月20日頃

確保する茎数の目安

栽植密度 (株/坪)	1株あたりの 茎数の目安 ^(注)
70	14~15本
60	17~18本
50	20~21本

注) 目標穂数380~400本/m²とした場合に、その8割の茎数に相当する1株あたりの茎数



茎数18本/株

中干し開始時期の株張程度(坪60株植)

- ② 中干しの期間
 - ・ 通常より長く14日間以上行う
- ③ 溝切り
 - ・ 10aあたり1本以上の溝切りを原則実施する
 - ・ 溝は、尻水戸までしっかりつなぐ
- ④ 中干しの程度
 - ・ 土の状態が軽くひび割れ、足跡が付く程度（写真）
- ⑤ 注意点
 - ・ 中干しの際は、強制落水は行わず、自然減水とする
 - ・ 晴天が続く場合は、適宜差し水をする



写真 中干しの程度

※ 所定の生産記録に溝切り作業日、中干し期間を記入します。

※ 砂質土壌などで減水深が3cm/日以上となるほ場などは溝切りを必須としません。ただし、全国共通取組「⑨長期中干し」では溝切りは必須です。

(3) 中干しの効果（営農上のメリット）

- ・ 無効げつを抑制し、過繁茂を防ぐ
- ・ 土壌中に酸素を供給し根の伸長を促すので、倒伏しにくくなり、登熟期の高温にも強くなる
- ・ 田面を固くすることで、中干し後の作業性（水管理・コンバイン作業）が向上する
- ・ 収穫直前まで入水できるようになり、胴割米の発生を防ぐ

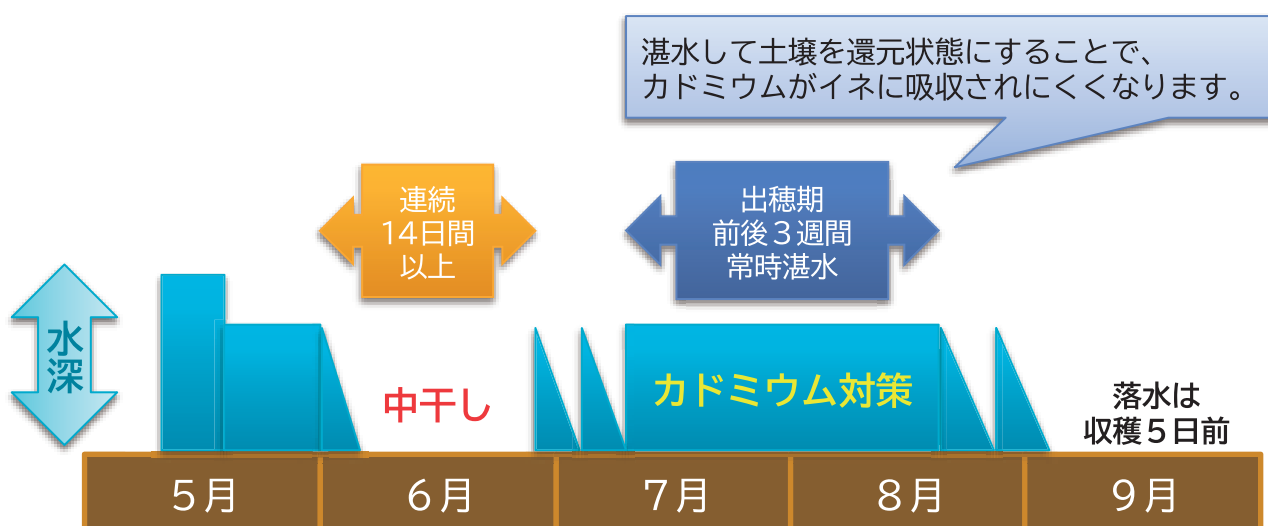


図 稲の水管理（コシヒカリ5月10日植、栽植密度60株での平年の目安）